児童館へ行こう

☎(295)4111

6月の休館日　毎週日・月曜日

■よちよち広場

児童館では、1歳4か月からの子とその保護者を対象に「よちよち広場」を開催しています。ぜひ、お気軽にご参加ください。

日　時　6月12日(金)、26日(金)
午前10時30分～11時30分
（受付時間は午前10時15分～10時30分）
対　象　1歳4か月からの子とその保護者
内　容　自由遊びなど（申込み不要）
持ち物　親のみ上履き
※お母さんの話し相手や、幼児と遊ぶボランティア募集中です。

■遊びにおいでよ！　ぴょんぴょん広場

日　時　6月3日(水)、10日(水)、17日(水)、24日(水)
午前10時30分～11時30分
対　象　2歳からの子とその保護者
内　容　体操・工作など（申込み不要）
持ち物　親子とも上履き

図書館へ行こう

☎(295)1015

6月の休館日　毎週月曜日および2日(火)～5日(金)

貸出点数（貸出期限）
図書・雑誌・紙芝居など／1人10点まで（3週間）
ビデオ・CD・DVD・カセット／1人3点まで（1週間）
※図書館システムの更新のためホームページが5月25日(月)から6月5日(金)まで利用できません。

■「特別整理休館期間」6月2日(火)～5日(金)

図書館では、蔵書の点検のため、上記の期間休館します。なお、休館中の資料の返却は、図書館入口および東公民館・歴史民俗資料館のブックポストにお願いします。皆さんにご不便をおかけしますが、ご協力をお願いします。

■子ども映画会

日　時　6月13日(土)
午後2時～3時30分
定　員　先着50人
内　容　「ユニコ」
（手塚治虫原作）

■おはなし会

日　時　6月27日(土)
午後2時～2時30分
内　容　おはなし、絵本の読み聞かせ、紙芝居など
対　象　1歳児から小学生まで。
小さなお子さんは、保護者同伴でご参加ください。

ぼくらのキャンパス

324　泉野小学校

4年　大川　翔大（しょうだい）くん

「4年生 初めての作品」

「楽しかった虫とり」

2年　古澤　樹（いつき）くん

1年　平松明日香（あすか）さん

「おともだちと
あそんだよ」

■本の紹介

『獣の奏者（そうじゃ）』1、2
上橋（うえはし）　菜穂子（なほこ）／著　講談社／出版社

「決（け）して人に馴（な）れない王獣と心を通わせることのできる少女・エリンの波乱の運命。大人にも読んでほしいハイ・ファンタジー」

『サルくんとブタさん　音が見える絵本』
たどころ　みなみ／作・絵　汐文社（ちょうぶんしゃ）／出版社

「生（う）まれたときから耳がきこえないブタさん。「音ってどんなものなの？」そんなブタさんに、音を教えてくれたサルくんがいました。心あたたまる絵本」

始まっています　地域内交流！

創意と工夫で参加した人に満足を！

下川原　ふれあい・いきいきサロン

下川原のふれあい・いきいきサロンは、自治会、寿会、民生委員、日赤奉仕団がタッグを組んで行っている。サロンの行事は、年4回行われ、各回とも趣向が凝らされた行事になっている。昨年度は、第1回目に、保健センター保健師による健康講座、第2回目には南京玉すだれや手品の実演を見学、第3回目は詩吟教室、そして第4回目はカラオケ教室が行われた。各回とも参加者は20人以上。サロン登録者のほとんどの人が参加している。

その企画を行っているのは、下川原ふれあい・いきいきサロン代表の栗原さんだ。「当初は、役員の負担が多くてたいへんでした。その負担を軽減するために各組で各回を分担して行うようにしたんです」。下川原は、5つの組に分かれており、役員は年4回の行事のうち自分の属する組が行うときの1回参加すればいいとの配慮もしている。

また、講師の選定にも工夫をしている。講師は、主に生涯学習課のボランティア人材バンクに登録している人のなかから講師を選び、お願いしている。「第1回目と第4回目は毎年同じ行事を行うのですが、2回目と3回目は、参加した人が飽きないように違った行事を行うようにしています。毎年続けていても、第4回目のカラオケ教室は、大好評なんですよ」と栗原さんは笑顔で語ってくれた。普段なかなか知り合うことができない人同士が知り合うことができ、人の輪が広がるところに喜びを感じるそうだ。

サロンの運営に力を尽くす栗原さん。「孤独な高齢者をひとりでも減らしたいんです。そのためにはひとりでも多くの人と顔見知りになる。何より隣近所のふれ合いが必要だと考えています。まだまだ頑張りますよ」と力強く語ってくれた。

▲大好評のカラオケ教室

毛呂山歴史散歩

文化財シリーズ195
馬の記憶

5月から6月は田の土を起こす田うないや代掻きの時期です。この作業は重労働で、かつては馬や牛が良く使われました。なかでも馬は作業も早く、多くの仕事ができたので重宝されましたが、年に数回の作業のためだけに馬を飼うことはたやすいことではありません。多くの場合厩は母屋内の土間に作られ、1日3回の餌やり、2・3日に1回のブラッシングと運動、週1回程の寝藁交換、2か月に1回の蹄鉄交換などがあり、飼育のために人を雇うことができる裕福な家が飼ったといいます。

しかし、毛呂山では流鏑馬祭りが行われていたため皆が馬に親しむ機会が多く、馬は記憶力がいいので流鏑馬の際など黙っていても馬宿に戻ってくるとか、遠方から酒に酔って馬上で寝てしまっても馬が家まで連れて帰ってくれるなどの馬にまつわる知識や伝承が生活のなかに息づいていました。

日本人が馬を飼育してきた歴史は古く、大化の改新（645年）以前から朝廷により「牧」と呼ばれる飼育地が設置され、馬は軍事・交通・儀礼など様ざまな用途に使われました。牧は平安時代中期以降、衰退していきましたが、牧の担い手であった在地領主が武士の起源の一つになったといわれます。埼玉県内では秩父牧がよく知られており、秩父牧の別当職から勢力を拡大した領主に秩父氏がいます。平安時代後期、秩父氏は秩父牧を基盤に軍事力を持ち、武士化していった領主といわれます。

このように馬の所有は権力保持を意味し、武士の歴史を作ってきましたが、一方では運搬や農耕にも使われるなど馬はごく身近な存在でした。戦後、機械化が進み、今日では馬と私たちの生活とはかけ離れたものになりましたが、流鏑馬祭りで馬に親しむ大勢の人びとを目の当たりにすると、馬に対する憧れは今も残されているのだと実感します。

馬による田の耕起再現
（毛呂山中央テレビ共聴組合提供）